

保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅳ）
－幼稚園実習と保育所実習における音楽活動指導の比較－

丸山京子

A Study of Preschool Education by Piano

Kyoko Maruyama

Summary

In this paper, we want to consider the role of the piano in preschool education. Furthermore, we consider how musical activities may differ in a kindergarten and a nursery. The student has recognized the importance of musical activities after their teaching praction. Consequently, the necessity for the most practical piano instruction is called for.

Received Oct. 31, 2002

Key words: musical activities, kindergarten, nursery music performance

I はじめに

本学「基礎音楽」（1年次）「音楽表現Ⅰ、Ⅱ」（2年次）授業においては実習に向けての幼児歌曲を教員があらかじめ選択し、学生に指導している。この選択曲目は「基本的な歌」（表2参照）を全ての学生が弾けることを目指し、「自由選択曲」については実習期間に合わせて学生が選んで弾く事としている。昨年3月および本年3月の拙稿（「保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅱ）－音楽活動指導の成果をとおして－」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第33集、2001年3月および「保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅲ）－音楽活動指導の成果と保育所実習をとおして－」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第34集、2002年3月）では幼稚園実習および保育所実習それぞれについての考察であった。今回実施したアンケートは年間を通したピアノ実技の成果が幼稚園実習、保育所実習でどのように生かされているかについてまとめてみた。

さらに、2月および5月の幼稚園実習と8月の保育所実習とを比較して、それぞれの実習に対応するピアノ指導のあり方についても検討をした。

Ⅱ 調査の方法

- ・調査日時：平成13年4月、6月、10月
- ・アンケート対象学生：平成12年度入学生 139名
 - 平成13年2月幼稚園実習Ⅰ 回答学生123名
 - 平成13年5月幼稚園実習Ⅱ 回答学生116名
 - 平成13年8月保育所実習 回答者数108名
- ・調査方法：実習参加学生に対して記述式のアンケート用紙を配布し、調査を行った。

Ⅲ 結果・考察

1. 実習前のピアノ練習について

①ピアノ練習の量的側面（表1参照）

第一回の幼稚園実習は平成13年2月（アンケート対象学生が1年次）に行われた（以下2月実習とする）。学生にとっては約1年間の授業（「基礎音楽」）の成果を発揮する最初の実習である。実習に向けた学生のピアノ練習は約6割の学生が週3日以上行っており、実習に向けた学生の意気込みが感じ取れる。つぎに平成13年5月（以下5月実習とする）の結果を見ると、ここでも約6割の学生が週に3日以上の実習を行っている。5月実習は第2回目の幼稚園実習であり、参加実習および指導実習を踏まえ責任をもたされる実習である。後に述べるように5月実習では2月実習での反省を活かした実習が行われており、学生の実習への意識が2月実習よりもより前向きになっている。そして、これがピアノ練習量にも表れている。たとえば、3日練習した学生の比率は2月実習が約3割（33.3%）なのに対して5月実習は約4割（37.9%）に増加している。また、毎日練習したという学生は2月実習に比べると5月実習ではほぼ倍増している。

ピアノ練習の時間を見ると、2月実習と5月実習共に半数以上の学生が1日30分以上練習している（2月実習52.0%、5月実習52.6%）。また、1時間以上練習している学生が28.5%（2月実習）と21.6%（5月実習）あり、両者を合わせると7割から8割の学生が1日30分から2時間までの練習時間を確保していることになる。また、8月の保育所実習（以下8月実習とする）に備えて30分以上練習する学生が増加している。

ピアノ練習の量的側面では、学生のピアノ練習量が実習経験を重ねるごとに増加していることがわかった。2月実習と8月実習を比較すると、前者では2日以下が最も比率が高く37.4%あり、後者では3日練習した比率が約半数（48.1%）で最も高い。学生は最後の実習となる8月実習前には平均的に2日に一回以上、一回あたり30分～1時間の割合でピアノを練習していることになる。すなわち、実習に向けてコンスタントに練習している姿があり、ピアノを取り入れて保育を実践するという学生の積極的な姿勢が見られる。

表1 実習に向けたピアノ練習回数・時間
(%)

		2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)
練習日数	2日以下	37.4	39.7	29.6
	3日	33.3	37.9	48.1
	4日	14.6	12.9	8.3
	5日	7.3	3.4	2.8
	毎日	3.3	6.0	9.3
練習時間	30分以下	12.2	23.3	25.0
	30分以上	52.0	52.6	56.5
	1時間以上	28.5	21.6	16.7
	2時間以上	2.4	0.9	0.9
	3時間以上	0.0	0.0	0.0

②ピアノ練習の質的側面

次に、ピアノ練習の質的側面について幼児歌曲の練習曲をもとにして検討してみた。拙稿（「保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅱ）」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第33集、2001年3月）でも述べたように、基本的な歌として表2中の5曲の練習を入学時より義務付けている。この結果、5曲とも2月実習、5月実習、8月実習前における練習比率が自由選択曲に比べてかなり高くなっている。しかし、各曲目別に2月実習、5月実習、8月実習の練習比率を検討してみると、徐々にその比率が低下する傾向にある。学生は基本的な歌の練習をしなくなってきたと単に結論付けられるのであろうか。

表中の基本的な歌以外の曲は、実習時期に応じた自由選択曲として学生が選択して練習している曲目である。2月実習では「ひなまつり」「おもいでアルバム」「一年生になったら」を練習した学生がそれぞれ47.2%、43.9%、35.0%と高い比率を示している。季節的に、春のひな祭り行事、卒園等を意識して選曲したことがこの結果に結びついていると思われる。5月実習では「かえるのうた」（32.8%）、「あくしゅでこんにちは」（22.4%）の比率が高い。これも4月の入園、6月の梅雨といったことが要因となっており、数値が上がっていると思われる。8月実習では夏に関する歌である「とんぼのめがね」（46.3%）、「シャボン玉」（29.6%）、「水あそび」（25.0%）の比率が高い。このように実習時期に合わせた選曲をして、学生は実習に臨んでいることがわかる。

表2 幼児歌曲の選択比率 (%)

		課題練習曲			実習に役立った曲			
		2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)	2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)	
基本的な歌	おはようの歌	61.8	62.9	57.4	25.2	43.1	8.3	
	おかえりの歌	82.9	67.2	62.0	32.5	47.4	18.5	
	おべんとうの歌	69.9	42.2	44.4	15.4	24.1	10.2	
	歯をみがきましょう	34.1	12.9	14.8	1.6	4.3	0.0	
	おかたづけ	43.1	19.8	24.1	2.4	2.6	0.0	
自由選択曲	二月実習	せんせいおともだち	31.7	14.7	16.7	4.9	5.2	0.0
		ひなまつり	47.2	6.9	4.6	29.3	0.0	0.0
		一年生になったら	35.0	5.2	5.6	4.1	0.0	0.0
		おもいでアルバム	43.9	6.0	10.2	7.3	0.0	0.0
		ゲーチョコキパーで何つくろう	12.2	7.8	10.2	0.0	7.8	4.6
	五月実習	握手でこんにちは	17.9	22.4	13.0	1.6	6.9	3.7
		とけいのうた	12.2	16.4	12.0	—	—	—
		かえるのうた	28.5	32.8	17.6	4.9	15.5	7.4
		ことりのうた	13.8	17.2	9.3	0.0	10.3	0.0
		トントントンひげじいさん	22.8	18.1	19.4	13.0	16.4	11.1
	八月実習	おててをあらいましょう	4.9	5.2	17.6	0.0	0.0	1.9
		水あそび	2.4	3.4	25.0	0.0	0.0	10.2
		シャボン玉	5.7	9.5	29.6	1.6	4.3	9.3
		とんぼのめがね	10.6	9.5	46.3	2.4	0.9	24.1
		頭・肩・ひざ・足(ポン)	1.6	9.5	4.6	2.4	5.2	4.6

次に、実習で役立った曲を見ると、2月実習において「役立った」と回答した基本的な歌の比率は5月実習において全ての曲目で上昇している。そこでは「おはようの歌」が43.1%、「おかえりの歌」が47.4%と高い比率で「役立った」と回答している。これに次いで「おべんとうの歌」が24.1%と約4人に1人が「役立った」としている。自由選択曲で同じように2月実習と5月実習を比べると総じて5月実習において「役立った」と答えた割合が高くなっているのがわかる。また8月実習では季節感のある「水あそび」「とんぼのめがね」が「役立った」と回答した比率が高い。後にも述べるが、上記の指定した曲以外にも学生は練習しており、とくに8月実習に向けてはその曲数が最も多い。

以上から考えられるのは、基本的な歌以外に実習時期に合わせた自由選択曲を選択し、学生がレパートリーを広げようとして努力していることがわかる。また、8月実習で基本的な歌の練習が少なくなったのであるが、それはより実践に近い練習曲を学生が自ら選んだ結果であり、相対的にはそれが少なくなったのであろう。この背景にあるのは、一年間の授業や日々の空き時間を利用した学生の自発的なピアノ練習の成果に基づく、学生のピアノ演奏技術の向上があると思われる。また他の質問では学生自らが選曲した表2以外の事前練習曲目を3曲まで記入してもらっている。ここにはさまざまな曲が挙げられており、実習を重ねるごとに曲目数が増えている。ここから学生がピアノを通した実習を強く意識していることが伺える（表3参照）。

表3 表2以外の練習曲

	曲数
2月実習（幼）	31
5月実習（幼）	32
8月実習（保）	47

2. ピアノを生かした幼稚園・保育所実習

①ピアノ演奏の頻度（表4参照）

実習時にピアノ演奏の機会があったのは2月実習で約4割（39.8%）、5月実習ではほぼ倍増の77.6%の学生である。また8月実習ではほぼ半数（49.1%）の学生がピアノ演奏の体験をしている。ピアノ演奏の頻度を見ると、5月実習では毎日引いた学生が2割ほど（19.0%）ある。幼稚園実習に限ると、2月・5月実習は同じ園での実習でもあり、ピアノを用いた保育参加の機会が増えたものと思われる。

2月実習ではピアノを生かした実習というよりも、幼稚園の雰囲気慣れて全体的な保育の流れを体験するようである。すなわち、2月実習は「第三者的な立場で子どもの行動や保育者の活動を見ることである。見学や観察は、実習生が保育現場に入ることによって、子どもや保育者の実際の姿を、養成校で教えられた知識と対比しながら理解するための大切な段階」（松本峰雄編著『四訂教育・保育・施設実習の手引き』建帛社、平成14年、24ページ）である。この結果、2月実習ではピアノを導入した実習機会が少なくなっていると思われる。これに比べて、5月実習では学生は幼稚園の雰囲気にも慣れピアノ技術の向上もあって、ピアノを生かしたより実践的な実習が行われていると思われる。ここから保育者養成校ではピアノを生かした音楽教育やピアノ以外の音楽活動を通じた現場で役立つ音楽教育が望まれる（表5参照）。

ピアノ演奏の機会が「あった」と「なかった」の比率をみると、5月実習ではそれぞれ77.6%、

22.4%であるのに対して8月実習では同じく49.1%、51.9%とほぼ半々になっている。この数値の格差をどのように考えたらよいのであろうか。この大きな要因としては幼稚園と保育所の機能・役割の相違があるかと思われる。改めて言うまでもなく幼稚園は学校教育法のもとで幼児に教育を行う学校である。一方保育所は児童福祉法に基づいた児童福祉施設である(『日本経済新聞』2002年4月13日付け)。要するに、保育所は子どもを親に代わって養育するという福祉活動に主眼を置いた機関であり、3歳未満児から就学前までと年齢の幅も広い。したがって、音楽を教えるという観点からのピアノ指導は幼稚園ほど活発ではないと思われる。しかし、保育所では音楽の導入がないわけではなく、保育の流れの雰囲気作りなどに導入されている(拙稿「保育者養成における音楽指導の一考察(Ⅲ)」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第34集、2002年3月参照)。この結果、8月実習におけるピアノ演奏の回数は「毎日弾いた」という比率が8.3%、「2日に1回弾いた」という比率が6.5%と5月実習に比べて極端に少なくなっている。さらに、ピアノ演奏の内容を見ると2月実習に比べて4月実習でのその項目の比率は全体として向上しているのわかる(表4参照)。そして、ピアノを弾くだけではなく、子どもを見ながら弾くという弾き歌いの実力が身につけていると思われる。

表4 実習園でのピアノ演奏頻度 (%)

		2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)
ピアノ 演奏	あり	39.8	77.6	49.1
	なし	60.2	22.4	51.9
回数	毎日	12.2	19.0	8.3
	2日に1回	5.7	18.1	6.5
	3日に1回	9.8	18.1	13.0
	週1回	13.8	22.4	19.4
内容	ピアノを弾くだけ	15.4	19.8	9.3
	弾きながら歌う	18.7	25.0	16.7
	子どもを見ながら弾く	7.3	13.8	6.5
	子どもを見ながらの弾き歌い	5.7	20.7	14.8

②ピアノ以外の音楽活動

実習期間中に学生がかかわる音楽活動は、ピアノ演奏以外にも多数ある。表5によると、「手あそび」が各実習で最も高い比率となっている。とくに、5月実習では86.2%の学生が「手あそび」を実習に取り入れている。これに次いで「子どもと歌う」が高い比率を示している。これは子どもとかかわる最初の接点としてふさわしい導入であると思われる。

表5 ピアノ以外の音楽活動（％）

	2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)
手あそび	69.1	86.2	60.2
紙しばい	12.2	12.1	14.8
子どもと歌う	49.6	58.6	50.0
あそび歌	13.0	17.2	16.7
その他	1.6	6.0	10.2

しかし、8月実習では2・5月実習の数値とは異なった傾向が示されている。8月実習は「紙しばい」「あそび歌」の導入も2月実習、5月実習に比べると若干高くなっている。ここから保育所実習はピアノ以外の音楽活動が幅広く導入されているのがわかる。保育所実習は一日の保育時間が長いこともあり、このような結果となったと思われる。

3. 音楽活動の重要性とピアノ実技の向上

①音楽活動の重要性と保育

実習後に学生がアンケートで回答した「子どもと音楽活動」について、以下で検討しよう。表6は「子どもの生活に音楽が必要か」、そしてそう思った「具体的保育活動の場面」についての回答結果である。

「子どもの生活にとって音楽が必要である」と回答したのは2月実習が87.8%、5月実習が91.4%、8月実習が92.6%ある。逆に、「そう思わない」と回答した学生はそれぞれ全くない。これは音楽活動が子どもにとって非常に重要な役割を果たしているという認識が大部分の学生に備わっていることを示している。しかも、実習を重ねるにつれてこの傾向が強くなっていることがわかる。

どのような保育活動のときに音楽の重要性を認識したのであろうか。2月実習では「子どもをまとめる時」(61.0%)、「子どもを励ます時」(52.0%)が半数以上の比率となっている。5月実習では2月実習と同じく「子どもをまとめる時」(69.8%)、「子どもを励ます時」(47.4%)が高い比率となっている。8月実習の数値を見ると上記とは異なった結果が見られる。最も高い数値は「雰囲気作り」(82.4%)で、これに次いで「子どもをまとめる時」(75.0%)、「保育活動の導入・終了時」(63.9%)が続いている。

表6 保育における音楽活動の重要性

(%)

		2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)
重要性	思う	87.8	91.4	92.6
	思わない	0.0	0.0	0.0
保育活動の 場面	子どもを励ます時	52.0	47.4	18.5
	子どもをまとめる時	61.0	69.8	75.0
	雰囲気作り	22.0	19.8	82.4
	保育活動の導入・終了時	28.5	35.3	63.9

このように2月実習及び5月実習と8月実習で異なった結果が見られた。この違いをどのように考えたらよいのであろうか。まず「子どもをまとめる時」というのはある保育活動からつぎの保育活動に移る時に子どもが行動する合図として、音楽が利用されていると思われる。また、保育者が子どもに話し掛けるとき等の合図としても利用されている。さて、8月実習で最も数値の高い「雰囲気作り」とはどのような保育場面が想像できるであろうか。たとえば、お昼寝の時間や水あそびの時間がある。このような場面での音楽の利用は合図としてではなく、保育の効果を高める一手段として考えられる。

② ピアノ実技の向上とピアノレッスン

実習後の反省点として、アンケートでは事前のピアノ練習で不足していた点を聞いている。

各実習期間で共通して比率の高い項目は「レパートリー（の拡大）」、「弾き歌い（実技の向上）」である。子どもの興味をいかにして保育者側に引き付けるかという課題は困難な問題であるが、これに利用できる活動のひとつがピアノ演奏であろう。そのためには子どもが良く知っている歌を数多く知り、弾ける必要がある。これがピアノ演奏のレパートリーを広げることにつながっていると思われる。また、ピアノの弾き歌いも同時に求められる。ピアノ実技の向上（表現力・ピアノテクニックの向上、基本的ピアノ技能の向上）がこれらの技術の基本になることはいうまでもない。

表7 不足していたピアノ実技項目

(%)

	2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)
レパートリー	52.0	47.4	66.7
弾き歌い	61.0	69.8	54.6
表現力	22.0	19.8	25.0
基本的ピアノ技能	28.5	35.3	25.9

そして、実習後学生がピアノ実技で不足していた項目を「基礎音楽」「音楽表現Ⅰ・Ⅱ」の授業で再度認識し、学生を指導する必要がある。

ピアノレッスンの時間は現在、授業と学生各自の空き時間がある。アンケートでは「基礎音楽」時間に加えて他にピアノ練習時間の確保を望む学生が4割近くある。また、ピアノ練習時間も学生がいろいろな方法を考えている(表8参照)。実習を終えた学生が保育現場におけるピアノ演奏の重要性を認識した結果がこの数値に表れている。

表8 ピアノ授業についての希望

(%)

	2月実習 (幼)	5月実習 (幼)	8月実習 (保)	
「基礎音楽」以外のピアノ授業の実施希望	39.8	38.8	40.7	
ピアノ練習時間	別の時間帯でピアノ授業を確保	20.3	11.2	14.8
	基礎音楽をピアノだけの時間に	8.9	10.3	9.3
	他の授業をピアノの時間に	5.7	6.9	9.3
	各自の練習時間を確保	10.6	12.1	12.0

4. おわりに

今後の研究課題として問題点を指摘し、あわせて平成14年度から始まった新課程に対応した指導にも取り入れたい。

第一に、ピアノの基本的技術の向上についてである。短大部にはピアノ演奏を経験している学生とそうでない学生が入学して来る。さらにピアノ経験者でも入学直前まで経験している学生とブランク時期があつて入学してくる学生がいる。また、ピアノ以外の楽器の演奏を経験している学生もいる。このようなさまざまな音楽経験を持っている学生に対して、保育士として持つべきピアノの基本的技術の向上と音楽表現の指導が望まれる。たとえば、ピアノ

ノ経験者と未経験者の学生とを考慮し、各々の学生レベルに合わせたピアノの基本的技術指導が考えられる。

第二に、幼稚園と保育所の両現場におけるピアノ演奏の位置付けである。幼稚園でのピアノ演奏は音楽教育の一環であり、「ピアノとともに歌う、表現する」という活動でもある。これに対して保育所ではピアノ演奏の位置付けが「音の流れ」といういわば雰囲気づくりのための位置付けであろう。このことは拙稿「保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅲ）－音楽活動指導の成果と保育所実習をとおして－」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第34集、2002年3月でもすでに指摘したところである。したがって、幼稚園と保育所それぞれに応じたピアノ演奏があり、保育者養成校ではこの相違にもとづいたピアノ指導の必要性が再確認されたことになる。また、音楽表現（たとえば、手あそび、歌あそび等）の側面においてもそれは同様である。

第三に、上記との関連でより実践に近い短大部でのピアノ指導が必要となろう。それには幼稚園および保育所においてどのような音楽教育が求められているかを幅広い観点から検討してみることが求められる。たとえば、表8では「基礎音楽」の授業以外にピアノ授業を実施してほしい、という学生の希望が4割近くあった。授業以外のピアノレッスン希望は指導者による個人レッスンと判断される。学生は一人でピアノレッスンをするという積極性よりも教員のもとでレッスンをするという受動的な練習方法をとっている。したがって、先にも述べたことと関連するが、指導者が学生のレベルに応じたレッスン・メニューを考えた確かな指導をすることが望まれる。そのような環境の中で学生が自ら練習時間を確保するという積極性が身につけばよいと思われる。これに加えて、それぞれの実習に合わせたピアノ練習以外の幅広い音楽活動の指導が求められる。

第四に、厚生労働省の保育士養成教育課程の法改正に伴って、平成14年度入学生から保育実習Ⅱ・Ⅲが増加した。これにより本学で従来から実施していた「教育実習Ⅰ」（幼稚園実習）が3ヶ月早く実施されることになった。したがって、入学後、実習に向けた学生のピアノ実技修得、音楽表現の修得期間が短くなるので、従来以上に密度の濃い能率的な指導が必要となる。

参考文献

- 松本峰雄編著『四訂教育・保育・施設実習の手引』平成14年、建帛社。
坂東貴代子編『こどもの歌ベストテン（改訂版）』平成13年、ドレミ楽譜出版。
（株）デプロ編『新・こどもの歌大全集（改訂版）』平成13年、（株）デプロ。